

## 『けものフレンズ』における神の表象

木内 英太\*

### 概要

2017年に放映されたアニメ「けものフレンズ」第一期が人気作になった理由として、一見シンプルなキャラクターやストーリーに隠された奥深い世界観が挙げられる。本論では、この作品の世界観に神の表象が読み取れることを論じる。

### はじめに

2017年に放映されたアニメ「けものフレンズ」第一期は、子供向きのようなシンプルな絵柄やストーリーであるにもかかわらず、この年を代表する人気作になった。人気作となった理由の一つとして、一見シンプルなキャラクターやストーリーに隠された世界観が挙げられる。明るく能天気な本編と、実際の廃墟の遊園地などを白黒の実写で写したエンディング映像とのミスマッチが話題となった。本論では、ユートピアのように見える世界のなかにディストピアを仄めかすこの作品には神が表象されていると読み解くことができることを論じる。

### 表現文化における神の機能

神は人知を超えた何かであり、人間の表現技法では表現できないと考えられている。人間の眼に見える視覚的な表現など五感で感じ取れる範囲、ラカンのいう想像界では神を具象化できない。人間の表現文化においては、芸術だけでなく大衆文化でも、そのことを意識しつつ、人間に認知や理解ができる具体的な表現を用いて神などの抽象的

なことを表象させてきている。人類は昔から、神を完全に表現することは不可能と知りつつ、神を人間に似た姿に仮託して描いたり、人間を超えた能力、いわゆる超能力を持つ怪物として描いたりしてきている。

ユダヤ教・キリスト教・イスラームの伝統では、戒律で神の像を作ってはならないと定められている。<sup>(1)</sup>マルクス・ガブリエルによると、神を示すイメージを表現することが禁じられ、神がいることを示唆する記号のみで示すことで「あらゆる現象の背後に隠されている崇拝すべき超対象について、わたしたちは何らかのイメージをもつことができるという考え方」を脱却することになるという。<sup>(2)</sup>現代の哲学的な考察では、神の実在を人類が証明することは不可能であることが前提で、神が現実存在するかどうか、ではなく、神は「いかなる意味の場に存在しているのか、どのように「神」が現象しているのか」ということだけを考察する。<sup>(3)</sup>

ニーチェが「神は死んだ」と述べた後の時代である現代につくられた単純な物語にも、一つの意味の場として神が存在していると読み取ることができる。動物を元に人間の子供のようにデザインされたかわいらしいキャラクターがかわいい声で「ドクタンバタン大騒ぎ」をする、ミーハーに消費されて大ヒットした日本のアニメ作品に、現象としての「神」を読み取ることを試みる。<sup>(4)</sup>

2023年11月30日受付

\* マス・コミュニケーション学科教授 英文学、英語圏文学

## 言葉を使えるフレンズたち

「けものフレンズ」に登場する、実在の動物を元にしたキャラクターであるフレンズたちには、人間の言葉が使えるという特徴がある。<sup>(5)</sup>このことでフレンズたちは、たとえ物語の開始時には今ここにあるもの以外には何も認知していないとしても、現前していないものを言葉によって理解できる。アニメ第一期の第1話で、まだ人間という「けもの」の存在も知らないサーバルは、「かばん」（主人公である人間のようなキャラクターの名前）が地図を見つけて読み取っている様子を見て、実際のジャパリパーク内の建物や道などの位置関係を縮小して紙に示しているという地図の概念を理解できる。

「かばん」が人間であるらしいのは、「けもの」のフレンズたちがそれぞれ備えている、実際の獣がもつ特徴が「かばん」には特に見つからないことのほかに、第1話から、ラッキービーストというロボットのような存在が、「かばん」には話しかけることから伺える。サーバルは、他のフレンズには決して話しかけないラッキービーストが「かばん」に対してしゃべったことに驚く。同じフレンズなのにラッキービーストには、「かばん」が人間であると認識されているので、言葉を用いようとするようである。そして第6話でハシビロコウのフレンズが「かばん」をヒトだと断言する。

マックス・ピカートは『沈黙の世界』において、「言葉は一つの存在、一つの全一体を表現するのであって、存在の単なる一部分をなすに過ぎない何らかの意志的なものを表現するのではない」と述べている。<sup>(6)</sup>このピカートの言葉を、國分功一郎は以下のように説明している。

すなわち、言葉はその場その時といういまここから切り離されうる。人間の言葉は、見えない部分や見えていない部分、もはや現前していない出来事やいまだ現前していない出来事を伝えることができる。そのような特徴

を指して、ピカートは「一つの存在、一つの全一体を表現する」とか「徹頭徹尾存在的である」と言ったのだった。<sup>(7)</sup>

言葉は、動物が衝動から身振りをするのとは異なる水準にある。言葉を用いることで現前しないものごとを伝えている。ピカートは「要するに言葉は世界なのである」とも述べている。<sup>(8)</sup>

人間は言語によって「現前していないものが組み込まれた世界や存在を経験すること」を可能にしている。<sup>(9)</sup>そして、「これが人間以外の動物にも可能であるのかどうかは不明である」という。<sup>(10)</sup>人間以外の動物には現前していないものを組み込んで認知ができない、とは言い切れない。

「けものフレンズ」ではフレンズたちは動物のように生きているが、人間の言語を用いてフレンズどうして会話ができる。そして、どうやら人間であるらしい「かばん」との出会い、「かばん」が「としょかん」に行くという会話を通して、文字を読んだことがないサーバルは、仲間として「かばんちゃん」と呼ぶことにした「かばん」のことが気になり、かばんちゃんと行動を共にする。

そしてサーバルは「かばん」と行動を共にすることで「かばん」の思考法、頭を使った問題点の解決の仕方に驚き、ますます「かばん」を気にするようになり、快適な環境の外に出て「かばん」についていく決心をする。快適な暑い「さばんなちほー」から、自身に適さない環境である寒い地方へとジャパリパークを横断していく原動力は、「かばん」への好奇心から、「かばん」が気にしている「謎」にまで好奇心をもったことである。

ジャパリパークは動物園のように管理されていて、設備がフレンズたちをうまくコントロールしている。パーク内には暑い地方から寒い地方までさまざまな環境が存在している。そこで生活をするフレンズたちは、世界がどのようになっているのか疑問を持たずに、それぞれに適した環境で毎日を過ごしている。「ジャパリまん」という食べ物が自動で生産され続けているので飢えることはない。けものだがお互いを食べあうことはしな

い。

ジャパリパークにいつの間にか存在していて、ただ生きているフレンズたちにとって、なぜこのパークはこうなっているのか、世界の成り立ちについての「真実」を知ることは不可能である。サーバルは、この世界に解けない「謎」があることに気がついていく。

謎に気がつくことで、世界があって当然のものではなく、「あるもの」と「ないもの」、見えるものと見えないもの、意味するものと意味されるものに分かれる。ないものを含む世界を認知すると、世界にあるひとつひとつのもの、できごとが記号となる。

「けものフレンズ」本編を通して何度も、過去にジャパリパークを設営して運営していた職人たちがいたことが画面上に映る様々な人工物から示唆されている。人間の視聴者にとって、ジャパリパークは、おそらく人間によって造られたのではないかと思える。しかしそのことに気がつかないまま生きている多くのフレンズたちにとって、「けものフレンズ」の世界には神はいない。しかし、そう定義するのには「神」という記号を用いる。サーバルが、ジャパリパークの「創造主」がいる、と考えはじめた時点で記号としての神は存在することになる。

視聴者には気がついていることだが、フレンズたちにとって、過去に存在していた根拠から推測されるパークの職人たちは唯一神ではない。しかし「ないもの」を含めた世界には「神」がいる。フレンズたちは、神は存在しないのに、神について考えることができるといえる。

### 始原の遅れ

「かばん」は初登場時から他のフレンドとは違う思考を持っている。ラッキービーストが断片的に示す情報から、それによって示される「謎」に注意を向けている。「かばん」は「としょかん」に辿り着くと、フクロウのフレンズである「はかせ」に頼まれて料理の作り方を調べて実践するが、その際、文字は読めないが「としょかん」に

ある情報の多さに気がつくことから、その世界の「始原」を意識してきているようである。物語の開始時から「かばん」は、自分は何の動物なのか、と疑問に思っているが、同じように、ジャパリパークはどのようにできているのかを知りたくなっている。この謎もあって「かばん」は、物語を通してサーバルと一緒にジャパリパークの端の海にまで冒険をする。

フレンズたちは自分のもともとは何の動物だったのかを知っていて疑いを持たないので、「かばん」の行動を促す原理を理解できないようである。「かばん」の行動原理は、物語内でセリフで明白に語られているように「自分は何者か」という疑問だけではなく、誕生時にはもう世界が出来上がって動いており、そこに遅れて登場したことである。

レヴィナスのいう「始原の遅れ」という言葉について、内田樹は、

一神教信仰とは「神がわれわれを創造した。われわれは被造物である」という意識のことで、そのように「遅れている」という意識を持つことを宗教的知性の覚醒だとレヴィナスは考えました。

と述べている。<sup>(11)</sup>

「かばん」は、第1話から既に、この「遅れている」という意識をもっている。この思考は他のフレンズたちには理解されないが、第10話でラッキービーストが「ミライさん」がいた頃の、どうやら過去のことらしいアーカイブ映像を壁に映して、そこにサーバルが映っていることで、サーバルにも少しだけではあるが理解される。過去に別のサーバルのフレンドが存在したと知ること、自分は遅れてきたと知るのである。

「私は始原に遅れている」という意識を持つことで、人間はある種の知的なブレイクスルーを果たすという。<sup>(12)</sup>人間のフレンドである「かばん」による「始原の遅れ」の意識が、物語が進むにつれてサーバルたちにも伝わり、知的なブレイクスルーがおこる。そのときに、フレンズたちは謎を

通じて神を意識するようになると考えられる。

## 死は存在しない

第9話のCパートでペンギンのフレンズたちのアイドルグループPPPなどが、フレンズがどのようにして生まれるのかを語り合っている。そこでは「サンドスターが動物にあたるとフレンズになる」という知識が語られている。フレンズが「生まれる」という概念はフレンズたちに共有されていることがわかる。

しかし彼女たちは「死」についてはわかっていないようである。セルリアンに食べられるとフレンズは死んでしまうという解釈があるが、オフィシャルガイドブックによると、食べられたアニマルガールは元の動物に戻るだけで死ぬことはないという。<sup>(13)(14)</sup>元の動物に戻ってからは死が存在するが、ジャパリパークの世界では死は存在しない。

第9話で、寒い「ゆきやまちほー」にきたサーバルは凍えながら「私の旅はここまでみたい…」と語り、かばんは「そうしてこんなことに…」と返事をするシーンで始まり、視聴者は「死ぬシーン」を連想する。しかし話が進むと、サーバルは温泉に入ろうとして間違えて水たまりに入ってしまっただけであった。このシーンからは、視聴者に死を連想させるようミスリーディングを促しつつ本人たちは死を意識していないことがわかる。

第10話では、タイリクオオカミのフレンズが、ロッジで眠ると夢に紫のセルリアンがでてきて食べられてしまい夢から出られなくなる、フレンズ型のセルリアンがいてセルリアンだという自覚がなく自分はフレンズだと思っているが実はセルリアンである、といった、創作話を語ってフレンズたちを怖がらせるが、それらの話では死そのものは語られず、死は仄めかすにとどまるエピソードとなっている。

第11話では、動物として知能が高いサル目オナガザル科シシバナザル属の、セルリアンハンターであるキンシコウのフレンズが、セルリアンに食べられたらどうなるのか、というサーバルたち

の質問に「死んでしまう」と言いすぎかもしれませんが…」と答えている。物語上、ここでサーバルたちが死について聞いていると示すことで、クライマックスの巨大セルリアンとの対決が盛り上がるのだが、サーバルは他のフレンズの話を真面目に聞いていて、そのあとで「わからないや」述べることもあり、死の概念を明確に理解しているのかどうかは不明である。

死は、死んだ後に確実にその記憶をもって生き帰らない限りは人知を超えており、記号を用いないと認知できないものである。第1話では、アードウルフのフレンズが巨大な青いセルリアンに食べられたと視聴者に思われたが、第12話でフレンズ化から動物に戻った状態でワンカットだけ登場している。<sup>(15)</sup>

フレンズたちの一部は、セルリアンに食べられると元に戻るということを知っている。しかし、けものが元に戻られる瞬間を見たことはなさそうである。もし、フレンズたちが言葉を用いて知識を継承して、言語によって「現前していないものが組み込まれた世界や存在を経験すること」ができる「人間」のようになる可能性があるとしたら、いつか、「死」すなわち人間的な言語使用と発達の可能性がなくなってしまうことを認知することになる。その時にはフレンズたちに死が存在するといえる。

## 実存者なき実存

ハイデガーの被投性という概念について、レヴィナスは、実存の「うちに－投げられて－あること」と訳さなければならないと述べている。<sup>(16)</sup>そこには、実存者なき〈実存すること〉、というような観念がその姿を現すという。<sup>(17)</sup>実存者がハイデガーの言葉でいう「投げられる」前から実存はあると考えるのである。

現実の世界では動物の種類が多く存在しており、それぞれの動物からサンドスターによって「けものフレンズ」の世界にフレンズが現れる。もし、ある動物のフレンズがセルリアンに食べられたとしたら、同じ種類の次のフレンズが誕生す



るまでは、その種のフレンズは「実存者なき〈実存すること〉」となる。第10話でラッキービーストが投影した過去の映像に映っていた、自分ではない過去のサーバルを見たことで、自分ではないサーバルが実在していたこと、サーバルが不在の可能性もあることなどに気がつき、サーバルは曖昧にはあるが実存を意識し始めたと考えられる。

レヴィナスによると、ハイデガーは実存と実存者を区別するが分断は考えていないという。<sup>(18)</sup>「けものフレンズ」の世界に実存する実存者であるフレンズたちは、実存のなかで実存について意識しないまま過ごしていて、実存者と分断した実存の次元に気がつかない。しかし、「かばん」とサーバルの物語が進むにつれて、2人と関わったフレンズたちは実存と実存者が分断される可能性に気がついていくのである。多くのフレンズたちには死の概念がないとしても、死とは別の、実存についての概念に気がついていく。

アガンベンによると、ギリシャ人は生を表現するのにゾーエーとビオスという二つの概念を用いていたという。ゾーエーは、生きているすべての存在（動物であれ人間であれ神であれ）に共通の、生きている、という単なる事実を表現し、ビオスは、それぞれの個体や集団に特有の生きる形式、生きかたを指していたという。<sup>(19)</sup>動物の種族代表のフレンドとしてゾーエーを生きていたフレンズは、「かばん」との出会いを通じて、人間的なビオスに目覚めていくといえよう。

第12話でサーバルは、セルリアンに食べられた後に「かばん」に助けられたことを知る。そして、「かばん」にしか話しかけないはずのラッキービーストが、サーバルに話しかける。それは「ヒトの緊急事態対応時のみフレンズへの干渉が許可されている」からだとしてラッキービーストはいうが、「サーバル、三人での旅、楽しかったよ」とヒトである「かばん」の緊急事態とは関係なくサーバルに話しかけている。ラッキービーストはサーバルのことをヒトのように見なしているのである。

サーバルは旅を続ける「かばん」と別れて「さ

ばんなちほー」に戻るつもりだったが、「かばん」との旅を続けることにして「かばん」の乗ったいかだを追いかける。個別の自分としての生を生きようとしているようである。

第12話のラストシーンで、ジャパリパークの外に向かって海でいかだを漕ぐ「かばん」とそれを追いかけるサーバルの周りには、無限の空と海が広がっている。表現文化において海と空の広がりには、神が表象されていると捉えられることが多い。そのこともあり、二人が最後に合流した時に流れる「ようこそジャパリパークへ」前奏のホーンと鐘のような音は神の祝福だと解釈できることも可能である。知らぬ間に覚醒しつつある二人は、禁断の知恵を得てしまったために楽園を追放されたアダムとイブのようである。ラストシーンで、新たに会ったフレンドと仲良くなろうとする二人は、神の使徒であると解釈することができる。

## おわりに

一見子供向けのシンプルなキャラクターによるアニメ「けものフレンズ」から、深遠な概念を読み取ることができる。深読みをしなくても純粋に楽しめる作品だが、制作側にその意図がなかったにしても、その奥深さから視聴者側からは数多くの考察や見解がインターネット上などに記されて受容されてきている。それらは事実かどうかは判定できないし、事実であるかどうかは価値を持たない「神話的説明」だが、そのようなディスクリブルを生み出させる「場」であることが「けものフレンズ」の予想外の大ヒットの一因であるといえる。

## 《注》

- (1) マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』清水一浩訳（講談社）p.220
- (2) 同上、p.220
- (3) 同上、p.236
- (4) 「ドットンバットン大騒ぎ」は、「けものフレンズ」主題歌「ようこそジャパリパークへ」の歌詞の一部。
- (5) friendの複数形がfriendsなのでフレンズたちという言い方は重言のようだが、『けものフレンズ』では

『けものフレンズ』における神の表象

一人でもフレンズというのが一般的である。

- (6) マックス・ピカート『沈黙の世界』佐野利勝訳（みすず書房）p.48
- (7) 國分功一郎「外国語は存在する」石井洋二郎編『リベラルアーツと外国語』（水声社）p.239
- (8) 同上
- (9) 同上
- (10) 同上，p.240
- (11) 内田樹「始源の遅れ～一神教と『論語』」，東京自由大学『宗教ってなに-3- 第1回』  
<https://www.t-jiyudaigaku.com/%E5%AE%97%E6%95%99%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%AA%E3%81%AB-3-%E7%AC%AC1%E5%9B%9E/>（閲覧日 2023 年 9 月 13 日）
- (12) 同上
- (13) 「けものフレンズ BD 付 オフィシャルガイドブック①」（KADOKAWA）p.5
- (14) アニマルガールという言い方はオフィシャルな言葉だがアニメ本編のセリフには出てこないこともあり，一般的には「フレンズ」という言い方が使われる。
- (15) アードウルフは，アニメ「けものフレンズ」第2期にも登場するが，第2期は本論のようなテーマで論じられるような作品ではない。
- (16) エマニュエル・レヴィナス『時間と他者』原田佳彦訳（法政大学出版局）p.12
- (17) 同上，pp.12-13
- (18) 同上，p.12
- (19) ジョルジュ・アガンベン『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳（以文社）p.7